

前回は、ゲラサの地で、レギオンという名の軍隊ほどの強い力を持つ悪霊に取りつかれていた男を、イエス様が悪霊を追い出し、そして癒されたという話でした。

今日は、このゲラサの出来事の話です。

21v「イエスが舟でまた向こう岸へ渡られると、大ぜいの人の群れがみもとに集まった。イエスは岸べにとどまっておられた。」

イエス様たちは、ゲラサの地を後にし、再びカペナウム側へと戻ってきました。そして船を下りるとすぐに、「大ぜいの人の群れ」が集まって来ました。21vの最後の「イエスは岸辺にとどまっておられた。」とは、到着してすぐに群衆が集まったことを教えています。カペナウム側のガリラヤ湖周辺の町々では、それほどイエス様の人気は大きく、人々がイエス様を求めてすぐに集まって来たのです。ゲラサの人々とは大きな違いです。

すると、そこへ22v「会堂管理者のひとりでヤイロというものが来」ました。当時、会堂管理者というのは、敬虔な信仰を持っている「長老」の様な人が選ばれていたようです。会堂は、ユダヤ人とユダヤ社会にとって非常に重要な場所ですから、そのような信頼できる人が選ばれたのは納得できることです。信頼されているということは、多くの人脈があったと考えられます。また地位も力も持っていたでしょう。それから金銭的に恵まれている環境であったことも考えられます。また、ルカの福音書でも「ヤイロ」という同じ名前が記されていることから、この「ヤイロ」という人は、当時、かなり有名な人であったことが考えられます。

その「ヤイロ」が、この時大勢の人々が見ている前で、「イエスを見て、その足もとにひれ伏し」たのです。たくさんの人々を前にした時に、彼は本当に恥ずかしい思いがあったことでしょう。けれども、もし恥ずかしいと思っただけで躊躇してれば、あっという間に人々はイエス様に殺到するでしょうから、イエス様の注意を惹くためにも、それなりの行動とまた勇気が必要だったと言えます。そして、彼にはそのことをどうしてもしなければならない、切羽詰まった理由がありました。

それが23vの「いっしょうけんめい願ってこう言った。「私の小さい娘が死にかけています。どうか、おいでください。娘の上に御手を置いてやってください。娘が直って、助かるようにしてください」

ということでした。ヤイロの「娘は死にかけて」、危篤でありました。まさに一刻を争う状況です。また42vを見ますと、この小さい娘というのは、この時12歳であったことが分かります。今で言えばちょうど小学6年生くらいです。色々物事が出来るようになって、いよいよ将来が楽しみになってきたというような頃でしょうか。その愛する娘が死にかけていたので、ヤイロは「いっしょうけんめい」必死になってイエス様にひれ伏してお願いしたのです。そしてその願いに、イエス様は、24vにあるように「そこで、イエスは彼といっしょに出かけられた」のです。

さてヤイロは、イエス様とお会いしたこの時まで、死にそんな娘に対して自分たちは何もしないでいたのでしょうか？いいえ、おそらくそうではなかったと思います。ヤイロは、イエス様があのゲラサの地に弟子たちと行かれている間も、娘の病の癒しと救いのために、自分のもっている地位も力もまた多くの人脈もそしてお金も使って、あの手この手で、娘の癒しのために、奮闘していたに違いないと思います。しかし、この時、ヤイロは自分のもっている地位や力や人脈やお金などのすべてのものを持ってしても、娘の命を救うためには、何の役にも立たないことをことごとく経験していた！ということでしょう。だからこそ、イエス様の前に恥を忍んで、ただただひれ伏して願うしかなかった！ということなのです。

ヤイロにしてみれば、やっとの思いでイエス様をお連れして、家路に向かっていたと言えます。

しかし、その途中、一人の女の人がやってきました。

25-33v「ところで、十二年の間長血をわずらっている女がいた。この女は多くの医者からひどいめに会わされて、自分の持ち物をみな使い果たしてしまっただが、何のかいもなく、かえって悪くなる一方であった。彼女は、イエスのことを耳にして、群衆の中に紛れ込み、うしろから、イエスの着物にさわった。

「お着物にさわることでもできれば、きっと直る」と考えていたからである。すると、すぐに、血の源がかれて、ひどい痛みが直ったことを、からだに感じた。イエスも、すぐに、自分のうちから力が外に出て行ったことに気づいて、群衆の中を振り向いて、「だれがわたしの着物にさわったのですか」と言われた。

そこで弟子たちはイエスに言った。「群衆があなたに押し迫っているのをご覧になっていて、それでも『だれがわたしにさわったのか』とおっしゃるのですか。」イエスは、それをした人を知ろうとして、見回しておられた。女は恐れおののき、自分の身に起こった事を知り、イエスの前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた。」

この女性は、12年間という実に長い間、長血といういわゆる婦人系の病にかかっていました。長血に関しては、レビ記 15:25-28 にその規定が記されています。

「もし女に、月のさわりの間ではないのに、長い日数にわたって血の漏出がある場合、あるいは月のさわりの間が過ぎても漏出がある場合、その汚れた漏出のある間中、彼女は、月のさわりの間と同じく汚れる。彼女がその漏出の間中に寝る床はすべて、月のさわりのときの床ようになる。その女のすわるすべての物は、その月のさわりの間の汚れのように汚れる。(彼女がさわる物は汚れる) これらの物にさわる者はだれでも汚れる。その者は衣服を洗い、水を浴びる。その者は夕方まで汚れる。(それにさわった他の者も汚れる) もし女がその漏出からきよくなったときには、七日を数える。その後その女はきよくなる。(癒しについても一定の厳しい規定があった。)」

このように長血というのは、旧約時代から当時も汚れた病とされ、病の間は人々から隔離されておりました。つまり人と触れあうことが出来なかったのです。しかし面白いことに、この女性は 27v にあるように、「イエスのことを耳にし」たのです。人から隔離されていた彼女が、どうやってイエス様のことを耳にしたのでしょうか？それは、おそらくこの女性に食事を運んだりするような、お世話をする人がいて、その人が、イエス様のことを教えてくれたのだと思います。

聖書には、こういった影の人物のことはほとんど記されていません。しかし、こうした見えざることの中にも、神の恵みが隠されていることがよくあります。本当に不思議に、そこになぜか備えられているということ、私たちが体験していると思います。そうした見えざる神の恵みがこの長血で苦しんでいる女性の上にもあったのです。この神の恵みを通して彼女は、イエス様のことを知り、そして隔離されている状況でありながらも、懸命な思いでイエス様のところに出て行ったのです。それはそれは本当に緊張したことでしょう。もし人々に、自分が長血の女であることがバレてしまったら、本当に大ごとになります。律法による規定を破ったので、もしかすると石打になるかもしれません。ですから『何とかバレないように…』という思いがあったのだと思います。まさしく 27 節 b の「群衆の中に紛れ込み、うしろから、イエスの着物にさわった。」とは、その思いの現れです。彼女は、多くの群衆の中から、誰であるかわからないように、紛れ込んで、そしてイエス様の前からではなく、うしろから、そして体ではなく、着物にさわった。のです。

しかし、彼女がどんなにごまかそうとしても、イエス様にはこの長血の女性のことが分かったのであります。それが 30v に記されています。「イエスも、すぐに、自分のうちから力が外に出て行ったことに気づいて、群衆の中を振り向いて、「だれがわたしの着物にさわったのですか」と言われた。」イエス様は、自分のうちから力が外に出て行ったことに気づいただけではなく、「だれがわたしの着物にさわったのですか」と言われました。それはまさ

しく、彼女のことを指していた言葉です。イエス様は、とっくに彼女のことを知っていました。けれどもイエス様はあえてここで、「だれがわたしの着物にさわったのですか」と言われたのです。もちろんこの時、イエス様の周りには、多くの群集が押し迫っておりました。ですから弟子たちも 31v で、「そこで弟子たちはイエスに言った。「群衆があなたに押し迫っているのをご覧になって、それでも『だれがわたしにさわったのか』とおっしゃるのですか。」と、これだけの人がいるのですから、誰かを探し出すなどということは、不可能である。とイエス様に答えています。

しかしイエス様は、その御自分に触れたであろうたくさんの人々の中から、わざわざ、ひとりだけ、他の者と明らかに違う思いと熱意とまた信仰を持って触った者が居る!ということ突き止めて、知りたかったのです。そしてそのために、自分やまた周りの皆の足をとめて、その者が自分から告白するのを待った!のです。

この時ヤイロにとっては、自分の娘が危篤だったので、「誰が着物に触ったのか?」ということは、どうでもいいことであり、わざわざ足を止めて、「探し出す必要があるのか?」と、思ったことであつたでしょう。また、そうしたイエス様と人々のやり取りの中に、焦りや苛立ちがきつとあつたと思います。

こうしたヤイロの見えざる思いというのを考えると、私たちも皆、同じような思いがあるのではではないでしょうか。つまり、およそ自分にとって関係のないことや、また今話しているある話題の中で、突然別のことが飛び込んできたときや、あるいは本当に緊急を要するような出来事があつた時でさえも、私たちは、まず自分の考えと、自分の要求を一番にします。そしてそれがあたかも一番大事であるかのように、他のことや他の人のことなどは後にしてくれと思ったり、または苛立ちを覚えることもあります。行列に並んで、割り込みをされた時などは、まさにその思いが出てきたりします。

私たちは、いつも、自分の目の前で成されていることの中に、いったいどれだけ自分の状況を上回る緊急事態があるのか?ということ冷静に気付くことは本当に難しく、なかなか出来ません。だから苛立ちます。そしてひどい時には赦せなくなったりもします。それが私たちの姿です。その出来事の背後に、神の何らかのご計画があることに、気付く余裕は、ほとんどないのです。

この時イエス様は、おそらくヤイロのそうした見えざる思いがあつたことを知っておられましたが、それでも、信仰の思いを持ってご自分の着物に触った者を見つけ出す必要があつたのです。

癒された女性は、『自分は確かにイエス様によって癒された!』ということを確認していたゆえに、その癒しを与えてくださったイエス様に、このことを隠しておくことはとてもできないと思い、「恐れおののき (33a)」しました。けれども彼女は、自分は本来、長血という隔離されていなければならない病を患わせていた者であつたことを、この大勢の人々の前で告白しなければならなくなります。それはとても大きな彼女にとって(彼女だけ)のハードルでした。しかし、そうした色々なことを考える中で、彼女はやはり、これまでの12年間、「多くの医者」からの治療を受けても、また、いかなる努力をしても、そしてそのために「自分の持ち物ぜんぶを使い果たして」も、「何のかいもなく、かえって悪くなる一方であつた」ことを思い出し、その本当につらかつた12年間の苦しみが、このイエス様!によって、一瞬のうちに癒されたことに、何よりも強い確信をもって、イエス様こそはまことの神である!!と知つたのです。ですから、このイエス様の前では、いかなるものも隠し通すことが出来ない!と思い、自分のすべてをこの大勢の人々が居る中で、つぶさに「余すところなく打ち明けた」のです。

これこそが、この時、イエス様がどうしても確認したかつた、彼女の本物の信仰ということでした。つまり言い換えるなら、彼女の信仰を確立するために、わざわざ大きなハードルを置き、「だれがわたしにさわったのか」と、信仰告白をするテストを彼女に与えたということです。「あなたは本当に私を信じているのですか。」ということです。私たちはどうでしょうか?

信仰告白というのは、本当に大きな意味があります。頭の中、心の中でどんなに自分は信じている。と言ひ聞か

せても、実際にその信仰を人前で告白することが出来ないということが時にあります。振り返ると、私たちにも、そんなことがあったのではないのでしょうか。けれども、神様はいつも個人的に語り掛けてくださって、「あなたはわたしを信じますか。」「だれがわたしにさわったのですか」と聞いてくださるのです。

さて、この出来事で足止めされて、時間がかかったためか、ヤイロが決して聞きたくなかった最悪の知らせが、届きました。

35「イエスが、まだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人がやって来て言った。「あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありますでしょう。」

これを聞いたときのヤイロの気持ちはいかほどであったらうか？と思います。大きな悲しみがあつたでしょう。絶望です……。

あるいはもしかすると、この長血の女性に怒りを持ったかもしれません。「あなたがいたから！」または、イエス様にさえ、憤りを覚えたかもしれません。「先生が、ぐずぐずしていたからですよ！」と、いうようにです。果たしてどうであつたかはわかりませんが、悲しみと絶望の淵に立たされていたことだけは確かだつたのではないのでしょうか。

そんなヤイロの気持ちを察してか、イエス様はすぐに 36v「イエスは、その話のことばをそばで聞いて、会堂管理者に言われた。「恐れなくて、ただ信じていなさい。」と言われたのです。

通常の間人であれば、35節の「あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありますでしょう。」という言葉に見られるように、結局のところ、「人は死んだら終わりです。」と考えるのがごくごく一般的なことだと言えます。ですから、如何に評判の良い、そして長血の女性を癒したイエス様であつたとしても、それは、生きている人間だからであつて、死んだものを生き返らせることなど、ありえない事と思うでしょう。それが極一般的な人々の反応であり言葉です。また 40 節の「イエスをあざ笑つた」という態度は、まさにそういうことです。

人々は、死という絶望の中では、何の希望もないと諦めます。そして、まさに何もできません。私たちは、死を目の前にしたら、ヤイロのようにどんなに人脈やお金や地位や力があろうが、諦めるしかありません。しかし、イエス様にとっては、人間が絶対にできない、そして変えることも超えることもできない死という絶望の中にあるうが、そこから救い出し、命を与えることが出来るお方なのです!!

この 36 節の「恐れなくて、ただ信じていなさい。」という言葉は、まさにそのことであります!

そして、もしかするとイエス様はこのヤイロの前で奇しくも、自分の娘と同じ 12 年という年数を経た長血の女性への癒しを通して、「神が人をどれほどあわれみ深いお方であるか」ということを、ヤイロへの見えざる神の恵みのメッセージとして先に与え、見せていたのかもしれません。

それが何より 34 節のイエス様の言葉だつたのではないかと思います。「・・・病氣にかからず、すこやかでいなさい。」この言葉に、ヤイロは、神のどこまでも深い御愛とあわれみを知ることができたでしょう。ですからイエス様は、訃報の中でも「恐れなくてただ信じていなさい」と、ヤイロを励ましたのです。

そして本当に、41-42v にあるように、「タリタ、クミ」と言われた。(訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい」という意味である。)すると、少女はすぐさま起き上がり、歩き始めた。十二歳にもなつていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに包まれた。」と、人間では決して解決することのできない絶望の淵である死からまさにヤイロの娘を甦らせたのです!!この時の彼らがイエス様に対する信仰の確信とは、いったいいかほどであつたのでしょうか。きっとヤイロにも、あの長血の女の信仰の決意の意味が分かつたのではないのでしょうか。

さてこの時、不思議なことに、イエス様はヤイロの娘を甦らせる時、彼女の両親の他はペテロとヤコブとヨハネ

だけしか中に入れず、癒しと甦りの御業を他の者へは、お見せになりませんでした。

一体なぜこんなことをなされたのでしょうか？

イエス様は、御自分の御業をなさるときに、その御業を見て経験した者が、いつも純粋で正しく信仰に結びつくことを求めておられます。ちょうど長血の女性がまさにそうでありました。またゲラセでの悪霊につかれていた男性の癒しでも、まさにそうでした。しかし、時に癒された者の中には、イエス様の御思いと反して、勝手に言い広める人々も居たのですが、それは決して望んでいたことではありませんでした。ですから、イエス様がこの時あえて、人々を限定されたのは、御業を見た人々の中に、純粋で正しく信仰に結びつく者だけを選ばれたということです。そして、そうした信仰を選ばれた彼らの内にイエス様は見出していた。と言えます。反対に、弟子であっても、その純粋な信仰に結びつくことがまだ不十分な時は、選ばれないということもある。のです。それが 43v 「**イエスは、このことをだれにも知らせないようにと、きびしくお命じになり・・・**」というイエス様の言葉に結び付きます。

ペテロとヤコブとヨハネにとっては、これまで以上にイエス様のことを信頼し、その純粋な信仰はますます養われて行ったでしょう。そして弟子訓練をされているイエス様も、まさにそのことを彼らの内に養いたかったのです。

さて、今日この箇所から、少なくとも二つのことを教えられたいと思います。

①は、長血の女性と、また娘を失くしたヤイロのように、たとえ人間の力では、どうすることもできない絶望、失望、そして無力な時であっても、イエス様の言われる、「**信仰があなたを直したのです。**」ということ、そして「**恐れずにただ信じていなさい**」という、純粋な信仰を持ち続けることの大切さであります。時に人は、『そんなことを信じてどうするんだ!』と「**あざ笑う**」人も居るでしょう。また、信仰を前面に押し出すときに、恥ずかしいと思い、ハードルとなることが出てくるときもあるでしょう。しかし、私たちはあの長血の女性のように、確信をもってイエス様を信じ切る！ということが必要です。

②は、人間のいかなる絶望、失望、無力な状況であっても、このイエス様だけは、圧倒的な神の御力により、私たちの思うことのすべてを超えて、御業を実際に成してくださるお方である！ということです。

神にとって不可能なことは、一つも無いのです。

だからこそ、この 36 節の「**恐れなくてただ信じていなさい**」との御声を覚え、どこまでも深い主の御愛に心から今週も感謝したいと思います。アーメン。